

## 演劇「タージ・マハルの衛兵」鑑賞

(Facebook 2020.9.4 より加筆修正)

佐々木真理

録画していた演劇「タージ・マハルの衛兵」を観ました。



作)ラジヴ・ジョセフ

翻訳)小田島創志

演出)小川絵梨子

キャスト)成河、亀田佳明

タージ・マハルの建設にあたり、夜通し警備に当たる2人の衛兵の、完成前夜からのやり取りを描いています。絶対的な支配者の下で奴隷のような生き方を強いられた人たちです。衛兵の一人は空想好きで自由を愛するバール、もう一人は現実的なフューマーン。2人は幼なじみで仲良しです。

下層の者は、衛兵は、決して振り返って廟を見てはいけません。でも美しいものの好きなバールがまず振り返り、抵抗していたフューマーンもついに振り返って見てしまいます。なんと美しい建造物であることか！舞台上に廟は現れないけれど、十分に観るものにそれを感じさせます。

さてこの話は、この廟を作った工匠が后妃に密かに思いを寄せていたことを知った皇帝が、この極めて有能な工匠の両手を「これが褒美だ！」と言って切り落とした話を元にしてあるみたいです。劇では、この2人の衛兵が廟の建設に携わった2万人の工匠たちの両手を切り落とすよう命ぜられます。今後これ以上に美しい建物を作らせないために。

この理不尽な命令に従い2人は計4万本の手を切り落とします。

バールは人の手を切ること、美しいものを作り出す手を切ること、つまりは美を殺すことに苦しみます。そんな彼をフューマーンは「これは命令で仕事なんだ。俺たちは仕事をしただけだと思ひ込むしかないんだ」とバールを落ち着かせるため、生きるために自分にも言い聞かせます。

切断の仕事を終え後始末まできちんとこなした2人は、その仕事振りを評価され、昇格してハーレム付き衛兵に抜擢されます。皇帝の側での任務になります。命令に従って完璧に仕

事をこなせばちゃんと評価されるんだとこの出世に喜ぶフューマーン。対しバーブルは皇帝に近づけるなら殺して一緒に森に逃げようと提案します。これが実行されると死刑は免れない。フューマーンは驚き恐れて、友を死刑から救うために3日間の投獄で済む罪をきせ、頭を冷やさせるために投獄させます。

しかし、フューマーンの父親(役人)はフューマーンのウソを見抜き、罰としてバーブルの両手を切断するよう命じ、フューマーンは苦しんだ挙げ句友の両手を切り落とします。

ラスト

フューマーンは、今夜も衛兵として立っています。つまり出世はしなかったのです。隣にバーブルは居ません。そして幻を見ます。バーブルと子供の頃行った森で、木の上に秘密基地を作って遊んだ時の情景です。それとも、バーブルの手を切ったのは夢で、2人で森に逃げ込んで暮らすことにしていたらという願いなのか。

2人芝居でしたが、ずっと集中して観ることができました。「個と全」をテーマにした演劇のVol.3とのこと。

絶対的かつ理不尽な権力の下でもがく下層の人々の姿に心が締め付けられました。

そして、一見自由な発想で美を愛するバーブルが人工的美(廟や彼の空想上の乗り物など)を愛しており、現実的なフューマーンが自然美(彼は鳥や植物が好き)を愛している点も興味深かった。

素晴らしい演劇でした。

絶対的権力の恐ろしいこと……。私的にあんな凄い廟作らせたなんて。お金を使い果たして、その後の治世は大変なことになったとのこと。

それにしても、本当に素晴らしい建物らしいですね。写真で見ても分かるけれど。

完璧なシンメトリーに作られたのに、後に皇帝シャー・ジャハーンが亡くなったとき、彼の遺体をタージ・マハルの後の横に置いたために、そこんところが唯一アシンメトリーになって台無しらしいです。

つまり、後の墓はあるけど、皇帝の墓は無いということ。

演劇って本当に良いものですねえ～

余談：私は高校生の時、このタージ・マハルの前にある池(?)で泳いだ夢をみたことがあります。